

フランツ・マルク《動物の運命》における「動物化」理念と実践 —ヴォリンガーとの関連をめぐって—

福田 龍紀（東北大学）

本発表は、20 世紀ドイツ表現主義画家フランツ・マルク（1880-1916 年）が構想した「動物化」理念と彼の作品《動物の運命》（1913 年）における実践に着目し、同時代の芸術学者ウィルヘルム・ヴォリンガー（1881-1965 年）が『抽象と感情移入』（1908 年出版）で提起した「抽象」概念との影響関係を踏まえて作品の新たな解釈を提示する。

戦争を予兆する破壊と混沌の中の動物を描く作品《動物の運命》に関する先行研究では、暗示録的指向、破壊と救済、精神的再生などの宗教的観点が主に言及されている（ランクハイト 1950 年、レヴァイン 1976 年、モフィット 1985 年、岡本 2022、2024 年など）。宗教的理想の表象という見解は重要だが、この作品の動物と自然という主題が「動物化」という芸術的理念の可視化を意図した可能性は深く論じられていない。本発表では、この作品の視覚的表象をマルクによる「動物化」の視覚的メタファーと捉え、その理念と実践にヴォリンガーの「抽象」概念との強い類似性があることを指摘する。

マルク自身が記した芸術論によれば、彼は社会の物質主義に反対し、芸術における精神性の擁護及び復権を目指し、「科学的に把握可能な世界の要求を知らない内的生命のイメージに立ち戻る」（『新しい絵画の構成的理念』、1912 年）ことが芸術創造の最大の課題である。彼はこの方向性を芸術の「動物化」と呼ぶ。それは純粹な眼を持つ動物の視点により「現象のヴェールの背後にある自然のうちに隠されたもの」（『新しい絵画』、1912 年）を捉えるという新しい芸術的理念を指す。

この「動物化」理念は、同時期の絵画《動物の運命》（1913 年）で視覚化された可能性がある。この作品では、強烈な色彩と鋭い抽象的な線が動物を囲み、動物も抽象的な姿へと変貌する。中央の鹿には直線が突き刺さり、混沌とした外的世界を抵抗なく受け入れている。当初、作品名は『木々は年輪を見せ、動物は血管を見せた』であったが、友人パウル・クレー（1879-1940 年）の提案で現在の作品名になったとされている。以前の作品名が示すように、彼は木々や動物の内面を描き、事物の背後にある内的なものの可視化を探求したことが伺える。

このように視覚化された「動物化」理念が同時代美術に影響を与えたヴォリンガーの「抽象」概念と明確な類似点を持つことは重要である。この概念では、芸術は混沌とした外界に対してその内的本性を抽象的な形態で捉え直し、人間に対立的な世界との親和を目指す。これはマルクの「動物化」理念及び作品《動物の運命》との強い類似性を持つ。

以上より、マルクの「動物化」理念とその実践をヴォリンガーと比較すると共に、他の表現主義者たちによる理念やテオドール・リップス（1851-1914 年）の感情移入論とも比較検討し、マルクの理念における新しい歴史的な位置付けを提案する。